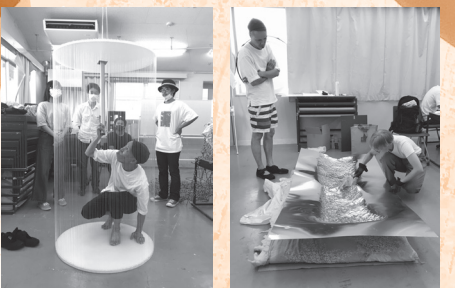


建築と美術の領域から生まれる表現

小松宏誠特任准教授 [37期]

建築学科で長年教鞭をとってこられた土屋公雄先生が2022年3月に退官されました。その後を受ける形で小松先生が着任し、小松スタジオがスタートしています。新たなスタジオ運営、ご自身の制作活動、また建築学科でアートを学ぶことについて、小松先生に伺いました。

土屋公雄先生からのバトンを前に考えたこと
土屋先生がムサビで達成した成果はとても素晴らしくユニークなものです。美大の建築学科という環境と、アーティストとして誇り高い先生が、ぶつかり合いスパークしたからこそ生まれた新しい領域です。ジャンルの境界を超える素晴らしい作品がいくつも生み出され、何人ものアーティストが活動を続け、様々な分野で活躍する卒業生がいます。そのような重いバトンを自分が受け継ぐ事は正直想像しておらず、戸惑いの方が大きかったです。自分は弟子としては少し外れている、土屋公雄教育の自信作ではないはず。その自認がバトンを受け取ることを躊躇させました。私はムサビの建築学科で土屋先生の作品に出会い、憧れから3年生くらいには「アーティストになりたい」と言っていたような学生でした。しかし、土屋先生はまだ4年生ゼミを担当しておらず、インステレーションで卒業なんて異端な時期でした。宮下先生の元で自由奔放に学生生活を堪能させていただきながら、課題以外で制作発表していた自分なりのアート作品を土屋先生に見ていただければ、「そんなのアートじゃねえ。」と何回も喝を頂いておりました。その後も大学院では「彫刻やプロダクトとして完結しがちなキネティックアートの世界に空間性を持ち込む」という野望を抱き「そんなのアートじゃねえ」領域を掘り進めてしまいました。今ではプロジェクトをご一緒させて頂いたり、展覧会をご覧いただき褒めて頂いたり嬉し限りですが、未だに自分の中の土屋先生は、「そんなのアートじゃねえから！」と現れます。バトンを受け取る決心ができたのは、美大の主役は学生だという考えに至ったからです。学生の興



設計計画Ⅳ チェンジュウギ講評風景
設計計画Ⅳ 森田夏奈指導風景
背景写真：設計計画Ⅲ ジョンンビン講評風景

味や意志が美大の歴史を紡いでいきます。学生時代の「凄いのつくるから、まっ見ててください!」といった盲信的なモチベーションは(何故かいまだに持っていますが)、甘酸っぱいです。そんなちょっと恥ずかしい思いを学生にプレゼントできるような、美大生の繊細でわがままなモチベーションを後押ししながら、伴走できるような先生になりたいと思っています。

小松スタジオの活動
小松スタジオの活動テーマは、土屋スタジオからのバトンを引き継ぎ「実践的な活動を通し、建築と美術の領域から生まれる表現を追及する。」です。アプローチや考え方は、自分の考えや得意な事をベースにチューニング直しました。以下に考えている事や、実施した前期課題の様子を、簡単にですが紹介させていただきます。

美大の建築学科というユニークな環境で、試行錯誤する経験が強みになる。
卒業生としての実感なのですが、まず美大の中に建築学科がある事がユニークでした。ムサビの仲間には様々な活躍をしているので、クリエイティブ業界の縮図のようにも感じます。そのような環境の中、自分の得意を見つけようと試行錯誤した経験は、自分の活躍の場を探してアプローチしていくサバイバル精神につながっていきました。また、建築学科の中で、同級生や先生から受けた刺激や考え方、そこから広がる興味は、違うジャンルに移りチャレンジを始めた際に、自分のユニークさとして活動を支えてくれました。それは20年近く経った今でも、自分の大切な軸として残っています。



設計計画Ⅲ 佐藤優樹作品

ムサビ建築の面白さを考える。
自分がそうだった様に、1学年80人も集まると、それぞれに様々な人生を歩むと思います。「建築」と「美術」は大きくなりなので、向き合う対象や考える事がとても多く、そこが面白いのです。ですので、美大においては一つの評価軸で競い合うゲームを楽しむのではなく、それぞれがそれぞれの発見を成熟させ、刺激を与え合い、外に向かって発信していくのが理想だと考えています。もちろん現実的に指導や評価をする事を考えると矛盾も生まれますが、理想とのバランスをチューニングしていくのも先生の大事な仕事ではないでしょうか。そして、設計、デザイン、構造、設備、ランドスケープ、美術と様々なアプローチをフォローできるプロフェッショナルが揃っているのがムサビ建築の特徴だと考えると、「建築家として活躍する」という目標同様に、それ以外の目標も好意的に後押ししたいと思えます。

多感で伸び代が豊富な時期に、自分が変わることと恐れるのもったいない。
美大生の伸び代を揺さぶるのは、今生み出さんとする作品へのモチベーションだと考えています。モチベーションを持って生み出した作品は自分に発見をもたらし、次の自分へと変化が生じるものです。その変化の先を考え過ぎ恐れてしまうと、制作へのモチベーションを低下させてしまう事が良くあります。1回自分の思い通り進めて、結果違うと思ったら修正する。その繰り返しで自分なりの精度と感覚を引き寄せる、有効なトレーニングとなると考え、スタジオの演習計画を立てました。美大の建築学科の中で何に気付き、どう変わっていくのか。自分で目標を定め、意欲的に試行錯誤する環境、集まる様々な成果こそが、建築と美術、そこから広がる世界を刺激し、豊かにしていくでしょう。

設計計画Ⅲ 狩野佑真+小松宏誠 「マテリアルから空間まで」
建築家を目指す学生、建築学科から他のジャンルに広がっていく学生、どちらにとっても共通のトレーニングとなる演習を計画しました。マテリアルを研究・自作するデザイナーで、活躍の機会が飛躍中の狩野佑真(かのうゆうま)さんにお声がけし、「マテリアルから空間まで」という課題を設定しました。手探りで新規性のあるアプローチや表現にたどり着くのは運もありますが、周りの仲間の試行錯誤も見ることができるととても良い経験になるだろうと話合っています。

設計計画Ⅲを終えて 狩野佑真
私自身がデザイナーであり小松先生もアーティストという指導教員の組合せを踏まえ、具体的な設計課題ではなく何か個人のふとした気付きやアイデアの種が「作品」へと育っていくプロセスを体験してもらいたいという思いから授業内容を計画した。前半は最終課題へ向けた準備運動として4週連続ワーク



設計計画Ⅳ 森田夏奈作品

ショップを行い、強制的に手や頭を動かしてもらいながら個々の「作品」のきっかけとなるヒントを探った。最終的な提出作品は何を作ってもよいという条件の中で、インステレーションやパフォーマンス・デジタルデータ・プロダクト・料理や現象をモチーフするなど本当に多様な作品が生まれた。これらの作品は、いわゆる建築設計には直接結びつかないと思われるが「小さなキッカケを作品にする」という行為は設計・デザイン・アートなどのクリエイティブにおいて垣根はないと思う。4年及び卒業後の進路として、もちろん全員が建築家になるわけではなく、今回の設計計画Ⅲの課題のように様々な進路があって当然だと思う。3年前期という大切な時期において、学生にとって少しでも将来の進路の選択肢・可能性を増やせればと思う。課題を通して得た作品を作る感覚を、ぜひ将来に活かしてもらえたら幸いです。

設計計画Ⅳ 田原唯之+小松宏誠 「表現する小屋」
自分で課題とアプローチを設定でき、表現のトレーニングとして有効な演習を計画しました。2010年から土屋先生と共に設計計画Ⅳを担当されており、アーティストとしても信頼している同年代の田原唯之(たはらただゆき)さんにお声がけし、「表現する小



ゼミ旅行 金津創作の森美術館 小松宏誠個展見学 [写真: Shin Inaba]

屋」という課題を設定しました。実物大の作品としてのリアリティのあるアプローチと強度を求めました。[自らの学びをどのようにして起動するのか] 田原唯之大学というフレームの中で与えられた課題へと解答すること、それを目的として始める学びは、どうしても手段というものに帰してしまいがちです。もちろんその中で得られる経験や知識もかけがいのないものには違いないのですが、1年後には社会へと出ていく彼らにとって最も必要なことは、解答でも手段でもなく課題を創り出していくことではないでしょうか。誰もが自分にとっての興味といったものを持っていることは間違いなく、それを如何にして継続していくことができるのか? 社会へと接続することができるとは、自らの興味を解答ではなく課題へと展開する必要があるのだと思います。このような考えから、今年度の設計計画Ⅳでは、「表現」と「小屋」というキーワードのみを最低限のフレームとして用意しました。そこから、手を動かすことと頭を動かすことの往復作業の中で見出される自分にとっての興味を再確認し、友人・教員という他者へと投げかける中で個人的な興味を課題へと展開する糸口を探って頂いてもらいました。ですのでこの授業において各学生が生み出したものは、何かに対する解答である以上に、何かしらの課題となっているのです。そしてこの一連のプロセスこそが

自分で課題とアプローチを設定でき、表現のトレーニングとして有効な演習を計画しました。2010年から土屋先生と共に設計計画Ⅳを担当されており、アーティストとしても信頼している同年代の田原唯之(たはらただゆき)さんにお声がけし、「表現する小

自らの学びであり、そこで生まれるものこそが表現になるのだと思います。

これから迎える卒業制作について
今、11名の小松スタジオの学生が卒業制作に挑み始めています。みんな真面目で性格的に不器用で、良い感じに頑固です。優秀な成績を狙った集大成よりも、荒削りでもこれからの自分の第一歩になるような卒業制作に挑んで欲しいので、一緒に試行錯誤し、もがく決心をしています。

小松宏誠 | Kosei Komatsu
アーティスト(空間表現・キネティックアート)
1981年生まれ。2004年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業、2006年東京芸術大学大学院(デザイン専攻)修了後、アーティストグループ「アトリエオモヤ」のメンバーとして、「自然の物理現象」に着目した作品制作を開始。2014年に独立。「浮遊」や「鳥」への興味からはじまり、現在では「軽さ」「動き」「光」に着目した作品を展開中。美術館での作品展示をはじめ、商業施設など大空間での空間演出も行う。[教育活動]
2013年-2019年 東京大学大学院情報学環 非常勤講師
様々な研究をする学生が集まりメディアアートの展覧会を行う名物授業において、作品制作のアドバイス、展覧会空間構成をはじめ、運営・アーカイブ等、関わる全ての事に対し補助を行なった。
2015年-2021年 武蔵野美術大学 建築学科 非常勤講師
土屋公雄先生の設計計画Ⅲを担当。東京散歩「場所のもつ記憶と力」というテーマで、アートをベースとした表現のトレーニングを目的とした、ワークショップ・作品制作の指導を行なった。
2022年- 武蔵野美術大学建築学科特任准教授



卒業生訪問

河童の家での発見 [前編]
畠山鉄生 [44期] + 吉野太基 [44期]

2022年住宅建築賞金賞を受賞した「河童の家」を訪ねました。解説をいただきながら見学を行い、河童の家の設計や建築についてインタビューを行いました。
「河童の家」 畠山鉄生 + 吉野太基 | アーキペラゴアーキテツスタジオ
建築の概要については、各メディアで発表されている内容をご覧ください。

「聞き手：星野(42期)」本日はありがとうございます。実際に拝見したのと、各メディアで発表されている内容を読ませていただいて感じたことですが、建築の中での色々な要素がひとつのあり方に固定化されてしまうことへの懸念を感じました。」「どこにも属さず、同時にそのすべてに属している」と「新建築住宅特集」では書かれていたと思います。そういった状態への志向というのは、お二人が設計するうえで前提のようなものになっているのでしょうか。
吉野：二人でやって初めて実現した建物なので、僕らも建築理論というか、これが自分たちの建築だ、といったものはなかったんです。むしろ条件的にかなり厳しいものだったので、8m少しのボリュームの中に3層いれようとするどうしても床を薄くしなければいけないし、階段室をつくってしまうと部屋として死んでしまうけれどそうならないためにはどうしたらいいかと、条件の中でどう豊かな建築を実現できるのかということ色々とスタディしていきました。結果としてこういう形が立ち現れてきて、これは床だったものが家具のように振る舞い始めていくよね、階段もこういう表現にすればこういう使い方ができるよねと、現れてきたものに対応していったという感じです。ですので、次にかをつくるときに、ここでやった手法をまたそのまま用いるのではなく、また新しく発見していきながら、自問自答しながらだと思っています。ただ、ここで発見できたことは大切なことだと感じています。

畠山：これと同じような設計手法として繰り返すつもりはないけど、河童の家を作ったことで発見した面白いこともあって、その一つが「冗長性」という言葉で表しているんです。建築を作る以上どうしても合理性や機能性を求められているし、それに対してどう

応えるかというのは設計の一つではあります。けれど僕らの肌感覚として、ずっと同じ価値観と同じ状況で世の中が進んでいく保証はないし、もう本当にいろんなことが起きるじゃないですか。冗長性って、バッファやゆとり、無駄、余白という意味があるんですが、場や概念に冗長性があることで、自分たちの環境や価値観の変化にも耐えうるといえるか、受け入れてくれる僕が深い器になるんじゃないかって改めて感じたんです。僕らが設計している建築もそうだし、そもそも空間や建築っていうものはそういう僕が深いものだって信じているから、そういう居場所を作りたいっていう思いはありますね。ただ、だからといって、こう決め付けたくないという気持ちもあります。僕らが感じたこと、考えたことに共感してくれる人もいるし、また違う風に捉えてくれる人もいて、それは凄く面白いので。河童の家は僕らが初めて手探りで設計して、二人ともそんなに言語化するのが上手なタイプではないので、内覧会であたりメディア掲載であたり、いろいろな形に立ち現れてきて、これは床だったものが家具のように振る舞い始めていくよね、階段もこういう表現にすればこういう使い方ができるよねと、現れてきたものに対応していったという感じです。ですので、次にかをつくるときに、ここでやった手法をまたそのまま用いるのではなく、また新しく発見していきながら、自問自答しながらだと思っています。ただ、ここで発見できたことは大切なことだと感じています。

星野：言語化がそんなに得意じゃないというお話があったんですが、言語によって空間と対話するのはまた別に、形を通しての対話の積み重ねはものすごい密度でありますよね。お二人の中でスタディのやりとりをしていくときには、どんな風に作業を進められているんでしょうか。

畠山：僕らは——
[日月会ウェブサイト掲載の後編につづく]

畠山鉄生 [左] | Tetsuo Hatakeyama
建築家
1986年富山県生まれ。2011年武蔵野美術大学卒業。2013年同大学大学院修士課程修了。増田信吾 + 大坪克巨を経て、2017年 Archipelago Architects Studio 設立。

吉野太基 [右] | Taiki Yoshino
建築家
1988年熊本県生まれ。2011年武蔵野美術大学卒業。2015年東京芸術大学大学院修士課程修了。長谷川豪建築設計事務所を経て、2020年 Archipelago Architects Studio 参画。



http://www.nichigetsukai.com/
日月会ウェブサイトでは、インタビュー後編のほか写真も多数掲載しています。

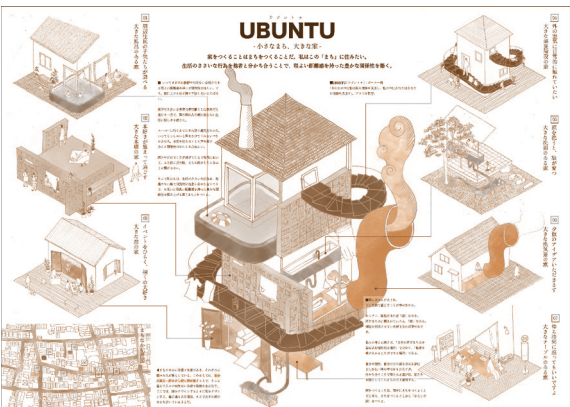


UBUNTU—小さなまち、大きな家—について

三原陽莉 [高橋スタジオ修士2年]・長谷川ゆい [長谷川スタジオ修士2年]



左:展示会トークイベント風景
(ゲスト:増田信吾さん)
右:1/1展示会場風景



展示の期間中には、建築家の増田信吾さん[40期]を招いてトークイベントも行われました。その内容を一部ご紹介いたします。

三原: UBUNTUへの率直な感想を教えてください。

増田: 素直に欲望に満ちた住宅だなと感じました。中は基本的に3層で作っていると思いますが、その周囲を、他者との関係をつくる要素が取り巻いていますよね。そういう状況を周りに作ってから、もう一回室内のあり方に踏み込んで行くような設計はあったのでしょうか？

長谷川: 周りの環境と中とを関係づける設計をしたのですが、そこからまた中に入っていき、さらに外を見て考えると言う感じですか？

増田: そうですね。そのもう一段階があまりなかったのではないかと感じてしまったんです。方向性の提案

—— UBUNTUは、コンペで最優秀賞を受賞した住宅案と、それを1/1に展開した展示のふたつがあります。まず、コンペ案について教えてください。

三原: この提案は昨年行われたハーフェレ学生デザインコンペティション2021テーマ「あなたの家」で提案し、最優秀賞をいただいた作品です。

長谷川: 2人で、「あなたの家」というテーマに対して話し合い、まず、「家」を定義するものは何なのかというのを考えました。キッチン、風呂トイレがあれば家なのか。好きなものを詰め込んだ家は幸せなのか。と、議論しました。

三原: そこで私たちは「自分」というものは自分だけでは成り立っておらず、他者との関係性の中で「私」というものが存在するように、「家」も同様に成り立っているのではないかと考え、「他者との関係性をつくりだす生活行為」の設計から「家」を考え、提案しました。

長谷川: まちに対して自分たちが分かちあえる生活行為は何だろうか話し合い、階段だったら…料理

の匂いだったら…などと挙げていき、生活行為を無理のない線で共有できる「家のようなまち」をつくりました。同時に、それらの生活行為を一つの建築に集合させたとき、「まちのような家」が作られ、生活のどの場面からも自然で無理のない線で他者と関わることができるようになります。

三原: モノが重なりあい、ずれあうことで様々な発見があり、その生活自体がファサードとなり、まちにとって変わりゆく風景となっていくこの家に可能性を感じています。

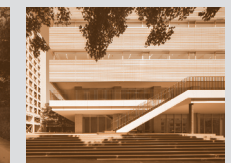
——1/1の体験型展示は、どのような目的で企画されたのでしょうか。

長谷川: コンペ発表後、この提案をこのコンペだけで終わらせたくないという2人で話し、展示することを決めました。

三原: 展示として多くの方の目に触れることで、気づきや学びがとて多く、価値あるものになったと感じています。

卒業から設計事務所勤務、そして独立まで

齊藤啓輔 [43期] 建築学科助手



左:中部大学14号館 応用化学棟
右:中部不言実行館ACTIVE PLAZA
写真:小川重雄

一級建築士事務所 1st atelier を主宰しながら建築学科で助手を務める齊藤啓輔さんに、在学中から現在の活動までをお伺いしました。

秋田県立大学から武蔵野美術大学へ

私は曇天灰色な富山南砺で生まれ育ち、秋田の山深い隔離された世界、秋田県立大学建築学科という修道院のような大学を卒業した後、修士2年間をムサビで過ごしました。

学部当時の「自らの主体性を消して建築に関わっていく工学的な姿勢」に違和感があり、作家として自らの中に普遍性を見つけないかと思いムサビに進学し、布施先生のもとで勉強させていただきました。

在学時に美学者・谷川渥著の「廃墟の美学」に出会

い、作家や建築家の強い経験によって、極めて個人的な「廃墟」のイメージが生み出され、それが作家の創造性や作家性に深く影響を与えているのではないかという言説に非常に共感しました。例えば、立原道造氏にとっての廃墟は「脆く儚い自らの身体」、磯崎新氏にとっての廃墟は「戦後一面の焼け野原の光景」といった点です。そこで私は自らの廃墟とは何かを探ることで作家性に至るのではないかという仮説を建てました。言い換えると富山や秋田で感じた「生き物や彩度ある景色を覆い尽くす容赦なく美しい自然の光景」が私の廃墟及び作家性という考えです。これは今でも私自身の眼前を照らす道標として大切にしています。

結論として修了制作では、SNSに疲れた人々が一切通信機器が届かない逃避行できる宿泊施設を設計。当時電波エリア圏外だった秘境駅である土合駅に直結して計画しました。

こんな社会に適応する気のない学生ですので就職

も全く考えていないところ、幸運なことにちょうど第一工房の新卒募集がありご縁があって採用いただき入社となりました。

第一工房での日々

20代は第一工房にて建築家 高橋誠一氏のそばで、福島県白河市の市立図書館、愛知県春日井市の中部大学キャンパス計画を含む大学施設4棟、プロポーザル多数など、様々なプロジェクトを先輩と一緒に担当させていただきました。ほぼ毎日高橋さんと一緒に仕事を進めることができたので思い出は沢山ありますが、ある日高橋さんに「お前にびったりの言葉があるからこれをやる。一生のテーマとしろ」と言われ直筆の書を頂きました。

「虚実皮膜の間」近松門左衛門の芸術論です。芸術というものは実像と虚像のちょうど皮膜程度のほんのわずかな間に存在するという教えです。私はこの教えが建築を作る普遍的で重要なバランス感覚だと思っています。残念ながら第一工房はその長い歴史に幕を閉じた後高橋さんも亡くられました。寂しさもありますが師匠なき今も目指すべき地平を示してくれていることに感謝しています。

被災地復興事業に飛び込む

第一工房閉鎖後、まだ30代前半で腕試しをしたいという気持ちもあり、様々な選択肢の中で一番難しいと思った東日本大震災被災地復興事業に飛び込むことにしました。当時岩手県や宮城県は復興最前線で新たな都市がそこに生まれようとしていました。ちょうど建築家 香山壽夫氏の事務所出身の若手建築家2者と、学校建築大家の長澤悟氏率いる教育環境研究所の3社JVが陸前高田市の新たな気

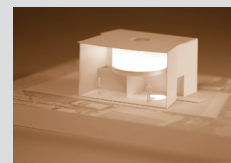
仙小学校のコンペで最優秀となり担当スタッフを募集していました。運よくご縁があり3社JVの一つの土屋辰之助氏主催の事務所での採用となり小学校のメイン担当として関わっていくことになります。現在気仙小学校は新たな街の中核施設として多くの人々に利用され地域のシンボルとして役割を果たしています。復興事業では様々なことがあります。陸前高田市に1年半常駐しましたが私たち設計者の限界を感じることに責任の重さを痛感し、建築家が果たすべき役割とは何かを考え直すことになりました。そんな環境で起業精神が芽生え設計事務所開業の意欲と建築家の職域を超えた活動の重要性が自分の中に湧いてきました。

設計事務所設立と活動、助手赴任について

東京に戻ったのちに一級建築士事務所を開業しました。また同時期に助手の募集があり縁あって赴任することになりました。両輪だとお休みなく忙しい日々ですが大学での業務が実務への刺激となりプロジェクトの広がりをもたらしていると感じています。土屋事務所と駒田建築設計事務所との3社JVで挑んだサレジオ学園児童園舎改築プロポーザルは残念ながら次点でしたが有意義な経験となりました。



陸前高田市立気仙小学校 写真:小川重雄



ある住宅の計画案
写真:阿部拓郎

いくつかの案件がコロナで経ち消えましたが、現在地元のまちづくり会社と共同しながら、富山南砺市の個人住宅改修や学習塾改修などを進めています。そのうち学習塾改修は事業者所有の物件を改修し、街の課題である公立学校以外の学びの場の展開を図ります。地域創生の時代に建築家が職域を自ら打ち破り、地方に良い影響を与えられるように様々な視点で活動できればと思っています。

在学生の皆さんへ

社会に出れば思い通りにいかないことの方が多いかもしれませんが。過去の価値観や出来事に捉われるのではなく目の前のことに集中し進めることが突破口であることがよくあります。私は変化を恐れず出来事を前向きに受け入れる姿勢を常に持ちたいと考えます。



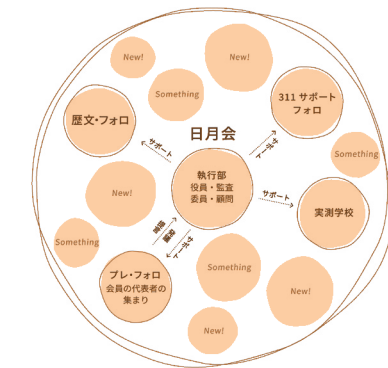
齊藤啓輔 [右] | Keisuke Saito

建築家

1985年富山県生まれ、2008年秋田県立大学建築学科卒業、2010年武蔵野美術大学大学院 建築学科卒業。株式会社 第一工房で公共建築や大学計画などに携わり、2016年よりSTAにて東日本大震災の復興事業で陸前高田市に常駐。2020年一級建築士事務所 1st atelier を設立し、同時に武蔵野美術大学 建築学科 助手となる。

日月会の組織デザインを考える

小津誠一 [23期] 日月会会長



日月会は、1968年(昭和43年)の設立から55年を迎えようとしています。建築学科第一期生の卒業とあわせて発足した日月会も、会員数は4000人を超えようとしています。私達、執行部にはそんな大きな組織としての実感はありませんが、多数の同窓や300名を超える現役生にとって存在意義のある日月会を目指して活動を続けてきました。ボランティアな意志に支えられて活動する日月会では、少数の執行部に負荷が掛かる現体制から、より柔軟に自己組織化し、様々な企画アイデアが生まれるようなサスティナブルなシステムへと変わっていく必要があることが見えてきました。セルフ・リノベーションによって、より良い日月会の再構築を考えるにいたりました。

フォロ(Foro)はイタリア語で広場を意味します。フォルマ(=かたち、Forma)に関わる会員が活動拠点フォルマ・フォロの群をつくる。日月会を、それら小さな活動がフラットな関係の中で集合する、より大きな広場、あるいは小都市のような場としていきたい。まさに日月会ウェブサイト「日月会のあり方」で表しているかたちを目指したいと考えています。

具体的には、執行部は最小限の構成とし各フォロをサポートする仕組みをつくっていきます。会報誌フォルマ・フォロ編集を担当するフォロ、セミナーやトークイベントを企画するフォロ、日月会建築賞を開催するフォロなどです。正会員や準会員であれば、執行部メンバー以外でも自由に参加できるものとします。今後、日月会ウェブサイトで、フォロの活動を公開し、新フォロ設立や参加メンバーも募集していきたいと考えています。ぜひ日月会ウェブサイトをご覧ください。

小津誠一 | Seichi Kozu 建築家 日月会会長

[日月会ウェブサイト]

<https://nichigetsukai.com/>

日月会の様々な活動を発信しています。

今号に掲載の「河童の家での発見[後編]」のほか、フォルマ・フォロのバックナンバーも公開中です。

[学生支援募金申込ページ]

<https://nichigetsukai.com/contact/donation-support/>

コロナ以降厳しい状況が続いている学生を支援するための募金を受け付けております。

[表紙写真]

小松スタジオ活動風景、設計計画Ⅲ 平林知也作品

写真:山田健人

[編集後記]

フォルマフォロ21号の発行にあたり、ご執筆いただいた皆様、取材にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。在学生、卒業生、先生や助手、様々な立場で活動する皆様の現在に触れることができ、あらためて建築学科の可能性を多面的に感じました。この誌面が皆様の活動を広める一助になれば幸いです。[星野千絵(42期)]
今回も様々な方たちの協力をいただきましたフォルマフォロを発行することができました。ありがとうございます。読みやすい誌面で情報を発信できるよう努めますので今後も楽しみにしていただけだと思います。[小田権史(46期)]

編集:星野千絵

デザイン:小田権史

印刷:株式会社山田写真製版所

発行:武蔵野美術大学建築学科 同窓会・日月会

<http://www.nichigetsukai.com>

東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学建築学科研究室内

Forma-Foro

21 フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会
Dec.2022 | VOL.21



「建築と美術の領域から生まれる表現」
小松宏誠

畠山鉄生+吉野太基

三原陽莉+長谷川ゆい

齊藤啓輔

小津誠一